

Gazette du bon ton, art-modes et frivolités, 1912-1925.

Paris, Centrale des beaux-arts. 25.5×20cm. <K383. 135-G> 文献番号 10-14

Hiler p. 356 Colas 1202

『ガゼット・デュ・ボン・トン』1912年-1925年

今世紀最大のモード誌をあげるとすれば、ためらうことなく私たちは本誌を推すであろう。ところで、このモード誌が高い評価を得ている理由はどこにあるのだろうか。それは疑いもなく本誌の豊かな芸術性そのものにある。

「稀にみるグラフィックな精妙さをもって刊行された」(ヴェロネージ) この雑誌は、フランスのジャーナリスト、リュシアン・ボージェルによって創刊された。彼の父はもともと高名なデシナトゥールで、当時有名な風刺雑誌に構想豊かな作品を発表していた。父のこの独創的才能を受け継いだリュシアン・ボージェルが、本誌の編集に着手したのはまだ26歳の時であった。当時彼はすでに『アール・エ・デコラシオン』誌の編集主任、およびもう一誌のディレクターを務めていた。このように彼はその全生涯をモードの高揚のための高級誌に捧げたのだった。ちなみに、ボン・トン誌廃刊後の彼は第二次大戦後まで『ジャルダン・デ・モード』誌の編集を続けている。

20世紀に入ってからからのモード誌のファッション・プレートは次第に網目写真版に置きかわりつつあって、かつての銅版手彩色の気品さとは比較にならない貧弱さに陥っていた。ボージェルを発奮させたのもこの点であった。当時のパリのオートクチュールではポワレのような新しいデザイナーたちの躍動が始まっており、『ポール・イリーブの語るポール・ポワレの衣装』<K593.028-M>とか『ジョルジュ・ルパーブのみたポール・ポワレの作品』<K593.087-P>といったユニークな衣装アルバムが刊行されていた。これらは「流行衣装の制作行為を印刷美術の制作行為と結びつけることによって趣味の統一のために貢献し」(ヴェロネージ)、独自の様式を樹立することができたという点では一つの偉大な行為であった。ボージェルはこうして多分、いても立ってもいられなくなったのであろう。これにはバクスト (Léon Bakst), バルピエ (George Barbier), マルタン (Charles Martin), イリーブ (Paul Iribe), ド・モンヴェール (Bernard Boutet de Monvel) の5人のほか、多くの若い画家や挿絵画家が参画した。この中にはデュフィ (Raoul Dufy), ルパーブ (Georges Lepape), ドリアン (Etienne Drian), マルティ (André Marty), ベニート (Eduardo de Benit) などがいる。

本誌は全12巻、70分冊からなっており、その構成は次のとおりである。

1年目 1912年11月から1913年10月までの12分冊 (第1・2巻各6分冊)。

2年目 1914年1月から1915年12月までの9分冊。(以後1916年から1919年までの4年間は第一次世界大戦のため休刊)。

3年目 1920年1月から同年12月までの10分冊。

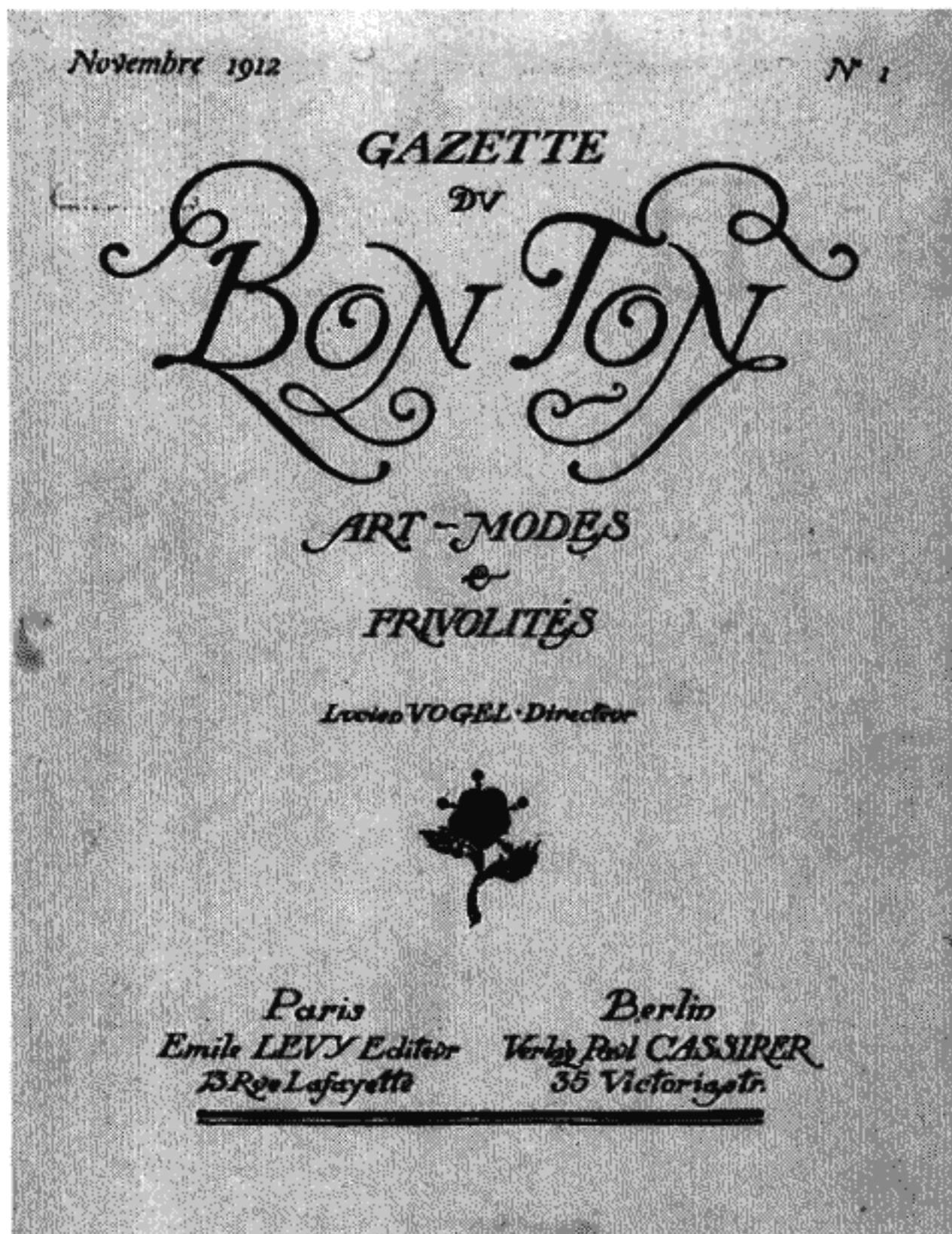
4年目 1921年1月から同年12月までの10分冊。

5年目 1922年2月から同年12月までの10分冊。

6年目 1923年6月から1924年6月までの10分冊。

7年目 1924年7月から1925年12月までの9分冊。

なお本館には『第一次世界大戦後のボン・トン, 1920年から22年までの抜粋』全2巻 *Le bon ton d'après-guerre, extraites des années 1920 à 1922 de la Gazette du bon ton*, <K383.135-B> という一種の事後抜粋集が刊行され, 代表的200枚のプレートが収められていることを付記しておく。(石山)



No. 1 (1912年11月号) 表紙



G. バルビエ画 No. 5 (1914年5月号) pl. 48